

近世日本におけるエンブレムの受容

——蘭和辞書と動物寓話を中心に*

松 田 美作子

序

現代の日本で「エンブレム」というと、企業や団体のシンボルマークの類、つまりドイツ語でいうワッペン（紋章）のような図像のことと考えられている。2020年東京オリンピックのエンブレムの剽窃騒ぎはいまだ記憶に新しいが、元来エンブレムとは、ルネサンス期のヨーロッパで流行したエンブレムブックに収められた、モットー、図像、そして図像を説明する詩文の3部位で構成された、教訓や真実を伝えるバイメディアルなジャンルのことである。このジャンルの創始者、アンドレア・アルチャートの『エンブレム集』（アウグスブルグ、1531年）が2000年に和訳され、¹⁾ わが国におけるエンブレム研究も徐々に進展がみられるが、西洋文化との出会いによって、どのようにエンブレムが取り入れられてきたかを跡付ける研究はほとんどない。そこで、本論では、安土桃山時代から18世紀までを対象に、西洋の知識との出会いの中で、エンブレムがどのように受容されたかを、動物寓話を中心に明らかにしたい。言葉と図像の協働を本質とする本来のエンブレムは、いわば絵入り本の祖型のひとつであるともいえるが、近世のそうした絵入り本の伝統において、イソップを中心とした動物寓話が、もっともよく普及していたからである。

わが国の西洋文化との出会いは、種子島に漂着したポルトガル人水夫が銃器を伝えた1543年に始まったといわれる。そののちフランシスコ・ザビエルが1549年鹿児島に上陸、イエズス会に拠る布教が展開された。彼らは、各地の学習所で熱心に教育を施し、語学、活版印刷、油絵、音楽など多岐にわたる西洋文化を伝えた。²⁾ それらの成果は、鎖国

に至るキリシタン弾圧によってほとんど現存しないが、たとえば、京都大学総合博物館所蔵の「マリア十五玄義図」は、当時の西洋絵画受容のレベルが高かったことを示している。(図1) この絵は、昭和5年(1930)、茨木市の古い民家の天井裏からもう一幅の「マリア十五玄義図」とともに奇跡的に発見されたが、二分された画面の下部にはイグナティウス・ロヨラとフランシスコ・ザビエルが描かれ、カトリック派の宗教的エンブレムでポピュラーであったザビエルの胸を広げているポーズは、真摯な信仰を表象している。イエズス会のイメージ戦略を考慮すると、こうした絵は、祭壇画としてキリシタンの天主堂に飾られていたと推測される。³⁾ 徳川幕府が成立後、アンボイナ事件によって、英国を東アジアから締め出し、ポルトガルに代わって日本との交易をおこなったのは、プロテスタント国オランダであった。布教より貿易に熱心な国と考えられたからである。

西洋文化との出会い

幕府がキリスト教を禁じて、オランダ物といわれる図2のような文様、長崎絵など、「阿蘭陀」といえば、エキゾチックで福を運ぶものとして人々の間でもはやされていた。エンブレムの受容を考えるうえで重要なのは、1720年、八代将軍吉宗が商工の発展を願ってキリスト教関連以外の書物の輸入を許可し、蘭学の端緒を開いたことである。それまで幕府は西洋の書物の輸入を禁じていたが、吉宗は、1717年、オランダ商館長、ヘンドリック・インダイクが将軍家綱に献上した二冊の本、万治二年(1659)に献上されたドドネウスの『草木誌』(1554)、寛文三年(1663)に献上されたヨンストンの『動物図説』(1660年刊)を書庫から取り出させ、出島の通史を呼んで訳させた。⁴⁾ 両書は挿絵入りの百科事典のような書物で、それらは忠実にコピーされた。それは、沈南蘋の画風を江戸に広めた宋紫石が編集したヨンストンを模した『古今画藪』(1770-79年刊)ライオン図をみれば明らかである。(図3) こうした百科全書のような西洋の知識研究は、観察に拠る経験的で複製可能な知識である。最初期の西洋の知識は、植物学、薬学、天文学といった実学的な技術と結びついていた。芸術の分野では、パースペクティヴ(遠近法)、キアロスクーロ(明暗法)、銅版画といった新しい絵画技術

が18世紀には受容されていた。そのなかで、一部の人は、再生可能で百科全書的な知識の伝統のほかに、エンブレムのように比喩のコードに拠って、比喩的に教える伝統のあることを気づいていたのである。蘭学には、大きく分けて以上のような二つの知識の類型があると考えられる。以後、エンブレムの受容について、後者の伝統を追っていきたい。

吉宗の時代、西洋の書物の輸入が増大するが、外国語のテキストの理解を大いに助ける挿絵入りのものが歓迎された。エンブレムブックに関しては、オランダのヤーコブ・カツ（Jacob Cats）の『古代近代の遊戯』（*Spiegel van den ouden ende niwen Tijd*, 1632年）か、『シレヌス・アルキビディス』（*Silenus Alcibiadis*, 1618年）がわが国に入っていた可能性がある。幕府の初代大目付、井上筑後守政重がカツのエンブレム集を入手し、その図像を絵にした屏風を何点か注文したという記録が残っているからであるが、屏風は焼失し現存していない。⁵⁾ 前述したが、西洋の挿絵入り本のなかで、最も早くからわが国で知られていたのは、イソップであろう。天正年間後半、1580年代には知られていたと推測されている。1593年天草で出版された大英図書館に唯一所蔵されている『エソポのハプラス』（1593年）が示すように、イソップ物語は、日本に初めて紹介された西洋の俗語文学である。⁶⁾ 当時ポルトガル人宣教師が日本語を学ぶための教科書であった。『エソポのハプラス』がローマ字かつ口語体で書かれていたのに対し、日本語で書かれたイソップ本もあった。古活字版『伊曾保物語』三巻本（1610 - 60年頃刊）は、国字で書かれた仮名草紙であった。万治二年（1659）、文語体で書かれた万治絵入り本が刊行され、近世以降の日本版イソップ寓話の伝統がうまれた。イソップ寓話は、ルネサンス期エンブレムの重要な材源のひとつであった。⁷⁾ わが国では禁教政策が続き、イソップ寓話の正確な出典や原作に込められたキリスト教的モラルも、理解されないままに普及していくこととなる。彼らはまず、図版とテキストを複製した。図4は、昭和九年、新村出が発見した土佐前田家に伝わったフォンデル（Joost van den Vondel）の『動物寓話集』（*Worande der Dieren*, 1617年）の模写（1791年）である。手書きによる12ページしかない模写であるが、モットー、図像、そして詩文というエンブレムの三部位を驚くべきほど精密に写している。図4はそのうちの一枚、カメレオンを描いたもので、図像に長い注釈とモラルがつけられている。プリニウス以来の博物学の伝

続から、エンブレムにおいてカメレオンは空気を食べて生きておりとされ、体の色が変化することから、信用できない追従者を表象していた。⁸⁾

蘭学者たちとエンブレム

18世紀後半に入り、1779年にストラダヌス (Jan van der Straet) の『狩獵：獸、鳥、魚』 (*Venetione ferarum avium, piscium*, 1578年) が、時の将軍吉宗に献上され、彼は前野良沢にその翻訳を命じた。良沢は、ラテン語エンブレムブックを、初めて和訳した人物である。Emblemaを「庵佛列嗎」と表記している。当時、ラテン語の辞書はなく、大変な苦勞の末、翻訳をした良沢は、テキストを訳すのみならず、そのページの意味を理解しようとした。彼の覚書、『西洋画賛訳文稿』(1779年)をみると、エンブレムを「アンブレマ」と読み、オランダ語の「シンネベエルド」であると次のように述べている。

アンブレマ (庵佛列嗎) 是拂郎察にて称する所の名なり。これを和蘭の語に翻訳すれば「シンネベエルド」(Zinnebeeld) と云ふなり。私に按ずるに「シンネ」とは此れにいう意識也。ベエルドとは此れにいう形を図に造ることなり。是則意識を形容するということにして、無声の詩というの類也。⁹⁾

シンネは意識、ベエルドは形を図に造ることで、エンブレムとは「無声の詩」であると正確に理解している。エンブレムが抽象的な概念を具象的な図で表したものであると、その寓意的特質を把握できていたと思われる。良沢は、杉田玄白らと四年もの歳月をかけて『解体新書』(1774年)を訳出しており、このことからオランダ語の理解が一層進み、蘭学が発展していたことがわかるが、その進展には辞書の成立も重要であった。¹⁰⁾

最初の蘭和辞書は、いわゆる「江戸ハルマ」と呼ばれるもので、ハルマというのは、フランソワ・ハルマ著の仏蘭辞書を基にしたからである。早稲田大学所蔵の稲村三伯訳の「江戸ハルマ」(1796年)には、Sinnebeeldは、Zinnebeeldと綴られているが、「比喩ノ画図」と訳されている。(図5) その後江戸ハルマに基づいていくつか和蘭辞書が作ら

れたが、そのうちの代表的なものがドウフ (Doeff) ハルマである。ドウフは、出島のオランダ商館長の名で、彼が長崎にハルマ辞書を持ってきたので、長崎ハルマとも呼ばれ、1833年に完成し、総見出し語数は五万以上ある。早稲田大学所蔵の道訳ハルマ(吉雄権之助ほか訳、坪井信道写し)というハルマ辞書の一つを見ると、Sinnebeeldは「たとえのことを図にしたるもの」と記されている。これらの例から、エンブレムはたとえを図にしたもの、つまり図像として解されている。そして、大槻玄沢の芝蘭堂に学んだ山村才助は、『西洋雑記』(1848年)において、オランダから伝わる知識や絵画をどのように解釈するかについて述べた箇所、だいたい経験主義に基づいているが、西洋を理解したいなら、比喩の画の伝統を知るべきであると説いている。¹¹⁾ 描かれた図像は何かを譬えているから、寓意的に解釈すべきもので、エンブレムは、西洋的な世界観を伝えるひとつの回路となり得たと思われる。そのような世界観を用いて西洋の知識を吸収しようとした代表的かつユニークな人物は、司馬江漢であろう。そこで、以下で彼のエンブレムに関する記述を見ていきたい。

司馬江漢の西洋的知識の探求

司馬江漢(1747-1818年)は、鈴木春信のもと、浮世絵の絵師としてキャリアを始める。絵描きとしての江漢は、スタイルを大きく変えていったことで知られている。最初、伝統的な花鳥画を描いていたが、やがて西洋的な写実の技法、遠近法などを学び、道具の工夫や日本にある材料で油絵の具を試作してさまざまなものを考案していく。絵画に関連したもののみならず、コーヒーの豆を挽くグラインダー、カメラ・オブスキューラ(覗きメガネ)などをオランダの書物を参考にして作ったり、実に好奇心旺盛な人物であった。¹²⁾ そして1788年、さらに西洋の知識を吸収すべく長崎へ向かう。

長崎への旅は、『西遊旅譚』(1790年出版)にまとめられている。そのなかで、長崎で彼の世話をよくしていた吉野幸作の肖像画を墨で描いている。(図6) 幸作の名がローマ字で画面上にみえる。エンゼルが二人描かれ、一人はラッパを、もう一人はリュートを持っていて、幸作が並みの人物でないことをエンゼルを書き加えて暗に示している。江漢は、

洋書の挿絵からエンゼルを写したと思われ、文化初年の作といわれる雪中の天使図が残されており、この淡彩図にも上部に「Enger Kind」とオランダ語の題字を入れている。¹³⁾ 長崎への旅から帰京して一年後、その記録をまとめて出版したが、そのなかに興味深いスケッチが含まれている。『西遊旅譚』第三巻に、オランダ商館長、ヘンドリック・ドーループの墓のスケッチとその記述がある。(図7) ここで江漢は、「碑に文字を彫りて金色を入れ、時計を刻む……かの国ニテハ譬えを以て教えとすること多し。画のこを則タトエとイエリ。」と述べている。¹⁴⁾ 文字と形象があわさって、そこに意味が込められていることを墓の時計装飾を見て理解しているのである。羽の付いた砂時計は、まさに人生の儚さを表象する代表的な図像である。さらに彼は1788年、『無言道人筆記』において、幸作に連れられて病が回復したオランダ人商人、ヘイスベルト・ヘンメイの屋敷を訪ねたときに、壁に掛けられた遭難した船の絵画をみたことを記述している。17世紀ヨーロッパのプロテスタント派の商人の家には、嵐の海を行く船や遭難した船の絵がよくかけられていた。(図8) 西洋ではこのような絵は、人の運命の儚さや強欲の戒めを寓意的に表すものとして広く普及していた。¹⁵⁾ こうした船の絵に興味を抱いた江漢は、船の遭難が運命の変遷を表しているという比喻表現に心惹かれたのではないだろうか。また、日本では病の回復を祝う時、縁起の良い鶴や亀を描いた絵を掛けるであろうに、このような絵画を飾ることに西洋と日本との相違を見出している。

江漢の西洋の知識への探求心は、さらに広範な西洋の書物への研究に向かった。江漢にはエレキテルのような新しい技術を教えてくれる友人たちがいた。蘭学者、辻蘭室の記録に拠れば、平賀源内がオランダのエンブレムブック、ヤン・ライケン (Jan Luyken) 作の『人間の正業』(*Het Menselyk Bedryf*, アムステルダム、1694年)を持っていて、江漢がそのうちの何ページかをコピーしていたという。¹⁶⁾ そのうち、船員の図をみてみよう。(図9左) この船員の図の詩文には船員が荒波を超えていくのを救世主のもとへ行く旅になぞらえており、キリスト教的なエンブレムとなっている。江漢は、詩文の意味を理解していなかったと思われるが、図を見ると、船員の顔は日本人らしく描かれていて、立木も江漢が書き加えたものであるが、西洋の図像を研究していたことが見てとれる。(図9右) オランダ語ができなくても江漢は、図像の研究のみな

らず、それが何を意味するかをこうしたエンブレムブックのエンブレムを用いて考えていた。

司馬江漢とエンブレム

エンブレムすなわちシンネベエルド (Sinnebeld) について最初に江漢が言及したのは、『オランダ俗話』(1798年)においてである。「惟学ものは聖人になり易し。然るに民俗野人其の理を曉し得かたし。故に是に教ユルに喩を以て導く。和蘭これを『シン子ベール』と云う。多くは画図を以て曉さしむ。」¹⁷⁾つまり、図を用いて譬えをもって教え導くもの、それをエンブレムと理解している。また、『春波楼筆記』では、イソップ物語にも言及し、次のように述べている。

イソポ物語と云う書は西洋の訳書なり。其の原本紀州候にあり、予直に見たり、皆譬えを以て教を説く。〔中略〕この書は西洋書にて、シンネベールと云う譬喩なり。いま和蘭の書を学ぶもの解し難き辭にして、二百年以前西洋の学をするものある事を知るべし」¹⁸⁾

江漢は、シンネベエルドを譬喩、譬え話を通じて教えるものと解釈していた。そのさい、彼の理解を助けたのは紀州候が持っていたオランダ語版イソップ物語であり、エンブレムをテキストに図が付されたものと理解していた。

そして、江漢のシンネベエルド理解をもっともよく表しているのが『訓蒙画解集』(1814年)である。これは出版されなかったが、93の挿絵と寓話、さらに25の挿絵と寓話が補遺に収められている。その序文で次のように述べている。

彼国の語にシンネベールと云って、譬えを以て教えとす、聖人道德経と同じ、故に今ここに古人の遺言数十話、窃に教言を後に附録して下に画をなし、のちに国字を以て解し、題して訓蒙画解集とし、訓蒙の眼を覚さんとて之に云フのミ¹⁹⁾

ここでは彼は、教言はモットーや詩文に相応し、画が下についている

ものをシンネバール、すなわちエンブレムと理解している。シンネバールとは、比喩を中心とした絵と文の組み合わせであり、そこには観察に留まらない知識論がある。絵と文を組み合わせ、両者の組み合わせによって何か道徳や真実を伝えるのがエンブレムであるが、前述の江漢の説明は、まさにそのエンブレムの本質と通じている。いうまでもなく江漢は、ルネサンス期西洋の body-soul の類比に拠ったエンブレム理論を知らない。エンブレムの図像、すなわち無言の詩は肉体に、モットーや詩文、すなわち物語る絵は魂にたとえられ、読者はモットーや詩文に導かれてエンブレムの図像の意義を学ぼうとする。²⁰⁾ 彼らは図像とテキストの相互作用にこそエンブレムの特質を認めているのであるが、二者間の相互作用を江漢も認識していると思われる。ただし、キリスト教的二元論において魂の優位、すなわちテキストの優位は不動であるが、図像とテキスト間の上下関係という観点は、江漢はじめ蘭学者にはなかったであろう。『訓蒙画解集』の大部分の材源は、中国の文人、莊子、韓非子や文選であるが、イソップを材源としたと思われるものが十ほど含まれている。たとえば、孔雀と鶏を描いた例をみてみよう。(図10) これは、江漢自作の一例であるが、イソップでは孔雀とカラス、孔雀とユノーあるいは孔雀と鶴で描かれるものと連関している。両者の教えるところが共通しているのである。鶏が孔雀にどうして全身そんなに美しい羽根で飾っているのかを尋ねると、孔雀はわからないと答える。そこで鶏が「孔雀の羽で飾らぬように」と教えを述べる。つまり、おのおの分をわきまえよという教訓を導くのに、まず題銘のような短い文が最初にある。「鶏対孔雀曰く。」この部分は、エンブレムでいうと、モットーにあたる。そして図を説明する文が続く。文の最後に「おらんとてハ、孔雀をハークと云、表向利口ニ見エ愚かなる者ヲ云、又表をかさり内せうあしき者のたとえ也」と、教訓を説く。孔雀が虚栄の表象であるというのは、ルネサンスのエンブレムを持ち出すまでもなく伝統的な西洋の比喩のコードのひとつである。エンブレムのように、孔雀が虚栄を表すという比喩のコードで表現する西洋的伝統を江漢は理解していた例といえよう。また、狼と鶴の図では、イソップの狐と鶴のような寓話に見られる教訓が表されている。最初に漢文が六行あり、それを読み下している。「狼、のどに骨を立て、七日食わず。ときに鶴が来る。「汝の長き嘴にて、此のほねをぬけ」と云ふ。鶴、おそれ畏みて其の骨をぬく狼のの

云ふ。「先ずなんじを喰うべし」と。恩をあだで返す話には、さまざまなヴァリエーションがあるが、動物になぞらえて善悪を説いている。江漢の『訓蒙画解集』は、エンブレムに近い構成、そして理念を備えている。具象的な絵に、抽象的な概念を込めて、比喩を用いて教えを導くという方法は、蘭学の初期に盛んであった単なる複製とは異なって、より高度な寓意に拠る西洋の知識の受容が看取できる。江漢のみがシンネベルドを理解していたわけではないが、当時の知識人の中でも、オランダから伝わった図絵や知識をどう解釈すればいいのか、真剣に考えた一人であった。西洋を理解するには、比喩の画の伝統を学ぶことが重要であると考えていた。

結び

これまで墓の彫刻、船の絵画、そして絵入りイソップ寓話を取り上げて、江漢のエンブレム理解を追ってきたが、なかでも江漢がシンネベルドに「比喩」ではなく、「譬喩」という字を使ったことに注目したい。どちらも「ひゆ」と読む。そして「喩」とは文体の根であり、論すという意味である。引喩、隱喩、風論など、すべてたとえを用いて論すことである。「比」は、くらべる、並べることであり、「譬」は、① ほかのものに似ている、ものを借りて説明する。② たとえること。③ 明らかにすること。これらの意味があり、とくに②のものを借りて説明するは、テキストの存在を暗示する。そこで、「譬喩」にはたとえ話という意味がある。通常、エンブレムは「寓意画」と訳出されることが多いが、江漢のように「譬喩」としたほうが具体的にテキストを含有していることが示されるので、適切であるように思われる。

明治維新後、オランダの影響力が減じ、イギリスやアメリカをはじめとするほかの国の影響が強まると、エンブレムもシンネベエルドではなく、英語の辞書に拠って受容され変容を遂げていくこととなるが、近世江戸期の蘭学者たちのエンブレム理解の努力は、日本的な想像力のフィルターがかかっていたにせよ、西洋の世界観理解の一助となった。本論では江漢を中心に、動物寓話に拠って西洋的な思考方法の理解を探ったが、今後さらに調査を進めて、エンブレム受容から変容の過程を明らかにしていきたい。

注

- 1) アルチャートの『エンブレム集』は、伊藤博明訳によりありな書房より出版された。
- 2) イエズス会東インド巡察師ヴァリニャーノによると、15万人以上の信者に、200以上のセミナリヨ、コレジヨやイヴィシアードがあった。詳細は、桑原直巳著『キリシタン時代とイエズス会教育—アレッサンドロ・ヴァリニャーノの旅路』（知泉書館、2017年）第5章参照。
- 3) 木村三郎「祭壇画としてのマリア十五玄義図について」鹿毛敏夫編『描かれたザビエルと戦国日本—西欧画家のアジア認識』（勉誠出版、2017年）119-132ページ参照。
- 4) 水戸徳川家に伝来したヨンストンの『動物図譜』ははじめ、西洋的図像の初期の受容に関しては、松方冬子編『日蘭関係史を読み解く 上巻 つなぐ人々』第9章、勝盛典子「蘭学と美術」288-292ページ参照。
- 5) タイモン・スクリーチ「江戸の視覚革命再考」サントリー美術館図録『のぞいてびっくり江戸絵画』（2014年）24ページ。日蘭知識交流の歴史に関して、井上ほど矛盾に満ちた人物はいないであろう。冷酷なキリシタン弾圧の中心的人物である一方で、エンブレムに限らず西洋の学術的知識の入手に非常に熱心であった。詳細は、以下の二編の論考参照。永積洋子「オランダ人の保護者としての井上筑後守政重」、『日本歴史』327号、1975年、1-17ページ。長谷川一夫「大目付井上筑後守政重の西洋医学への関心」、岩井成一編『近世の洋学と海外交渉』（巖南書店、1979年）196-238ページ。
- 6) 『イソポのハプラス』および『伊曾保物語』の主な典拠は、シュタインヘーヴェル版をもとにしたスペイン語版イソップ寓話集がもととなったイソップ寓話集だと、伊藤博明氏は、以下の論文で同定している。「ボッジョ・ブラッチョリーニと『伊曾保物語』—シュタインヘーヴェル編イソップ寓話集のスペイン語版について」、埼玉大学紀要（教養学部）第45巻第2号（平成22年3月）1-15ページ。
- 7) エンブレムの材源としての動物寓話、とくにイソップに関しては、以下を参照。Edward Hodnett, *Aesop in England: The Transformation of Motifs in Seventeenth-Century Illustrations of Aesop's Fables* (Charlottesville: The University Press of Virginia, 1979), pp. 41-2.
- 8) 前出のアルチャートの『エンブレム集』97ページは、「追従者」と云うモットーでカメレオンを描いている。図4の熟覧・撮影に関して、前田土佐守家資料館学芸員竹松幸香氏の協力を得た。ここに記して感謝申し上げます。
- 9) 新村出監修 前野良沢『西洋画賛訳文稿』復刻版海表蔵書第六巻（成山堂書店、昭和60年）22ページ。
- 10) 辞書におけるエンブレムに注目した考察の一部は、2016年3月、グラスゴー大学図書館スターリング・マックスウェルセミナーにて科研「近代英

国のエンブレムと宗教文学の相関性に関する研究」(課題番号 15K02314)の成果として発表した。(“The Reception of Zinnebeeld in the Intellectual History of 18th Century Japan”)

- 11) 『西洋雑記』(下) 写し(国会図書館蔵)、33-4 ページ参照。
- 12) 江漢の広範な活動をまとめて紹介した展覧会が、2000年にアムステルダムの歴史博物館で開催された。(Japanese Verwondering: Shiba Kokan Kunstenaar in de boan von het Westen)
- 13) 『司馬江漢全集』(八坂書房、1993年)第4巻、281ページの図236を見よ。以後、江漢からの引用および図7、10、11は、すべてこの全集に拠る。
- 14) 『司馬江漢全集』第1巻、108-9ページ。
- 15) タイモン・スクルーチ著、村山和裕訳『オランダが通る 人間交流の江戸美術史』(東京大学出版会、2011年)57-9ページ。および船の遭難に、いかにキリスト教的な寓意が込められていたかについては、以下の論考を参照。Christine Riding, “Shipwreck and Storm in British Art” in Eleanor Hughes ed, *Spreading Canvas: Eighteenth-Century British Marine Painting* (Yale University Press, 2016), pp. 89-99.
- 16) 江漢とライケンの比較研究として、Calvan L.French, *Shiba Kokan: Artist, Innovator, and Pioneer in the Westernization of Japan* (NY: Weatherhill, 1974)がある。
- 17) 『司馬江漢全集』第3巻、131ページ。
- 18) 同第2巻、297ページ。
- 19) 同第2巻、283ページ。
- 20) ルネサンスの代表的エンブレム理論家に、17世紀フランスの Claude Mignault が挙げられる。Body-soulの類比に関しては以下を参照。Laurence Grove, “Ninth Art of France” in *New Directions in Emblem Studies* (University of Glasgow, 1999), p.56.

* 本稿は、日本比較文学会第五十四回東京大会(法政大学、2016年10月16日)にて口頭発表した「江戸期におけるエンブレムの受容—動物寓話と Sinnebild」に加筆補正したものである。



図1. 聖母マリア十五女義図（16世紀後半から17世紀前半）
（京都大学総合博物館蔵）



図2. 有田焼皿（西洋人紋様）（神戸市立博物館蔵）

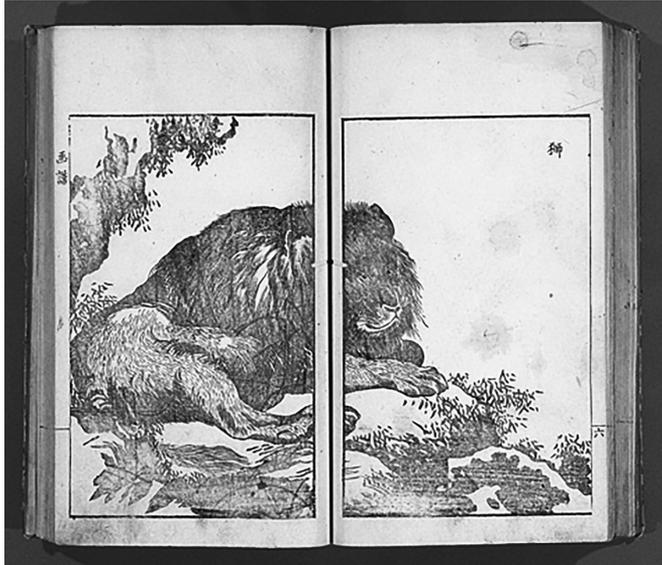


図 3. ヨンストン『動物図説』に基づく宋紫石『古今画藪』（1770-79 年刊）

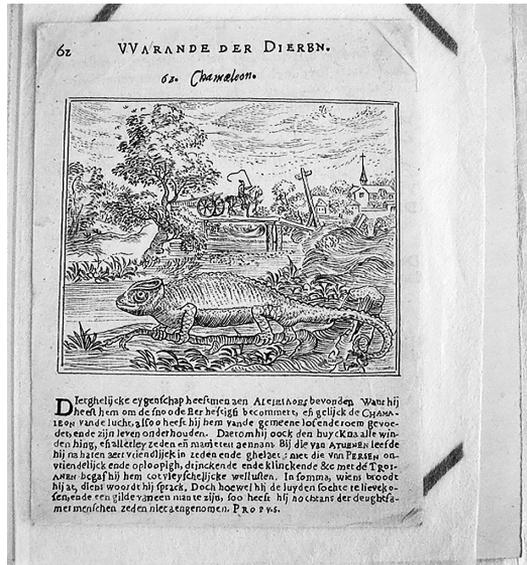


図 4. 前田家所蔵フォンデル
(Joost van den Vondel's *Warande der Dieren*, 1617)
(前田土佐守家資料館蔵)

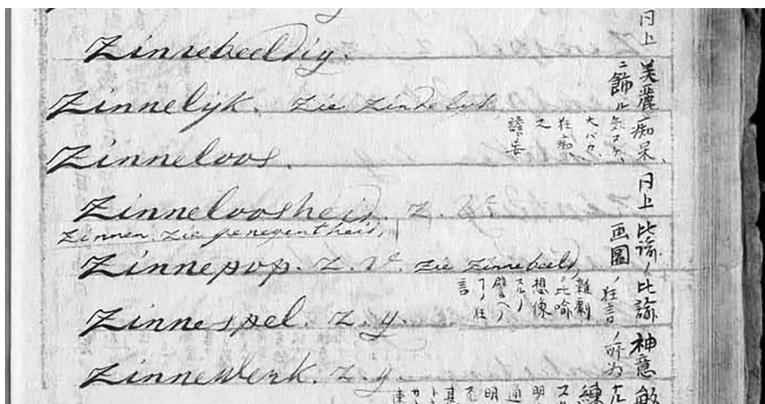
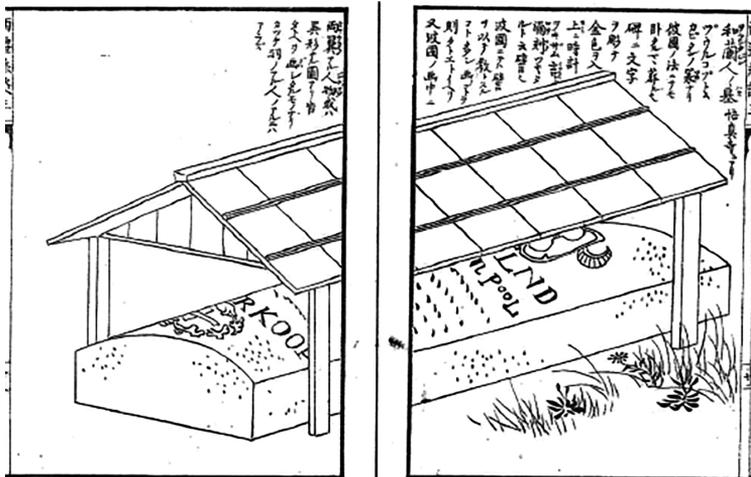


図5. 江戸ハルマ中の Zinnebeeld Zinnebeeld = 比喩ノ画図



図6. 司馬江漢 墨で描いた吉野幸作像 (1788年)
(個人蔵)



阿蘭陀商館員 Hendrik Duurkoop の墓のスケッチ
 (『西遊旅譚』巻之三より)



図7. ヘンドリック・ドーループの墓 部分 (悟真寺、長崎)



図 8. 『イライザ号の難破図』 (画家不詳) 1798-99 年
ピーボディ・エセックス博物館蔵



図 9. 水夫：ヤン・リュイケン *Het Menselyk Bedryf* (『人間の職業』 アムステルダム、1694 年) 江漢の水夫図

